



(棕鳩十文学記念館所蔵)

伝えたいこと

むくはとしゅう
棕鳩十

棕鳩十という、鹿児島をこよなく愛した一人の作家がいます。鹿児島県の一教師から身を立て、県立図書館長等を歴任し、「母と子の二十分間読書運動」を創設した、児童文学の巨匠です。

鳩十は、一九〇五年（明治三十八年）に長野県の喬木村で生まれました。南アルプスと中央アルプスに挟まれた広大な谷間にあるところで、村の中を天竜川という大きな川が流れています。鳩十の本名は久保田彦穂ひこほといい、父と母の両親に、姉と妹が一人ずつ、そして祖母と本人との六人家族でした。

【教科書の棕鳩十作品】

棕鳩十の作品「大造じいさんとガン」は、小学校五年生の国語の教科書（光村図書）にも登場する。雁がんを狩ろうとする大造じいさんと、利口な雁の知恵比べを描いた作品。

【母と子の二十分間読書運動】

棕鳩十が県立図書館長時代の一九六〇年（昭和三十五年）に提唱した運動で、「教科書以外の本を、子どもが二十分間くらい読むのを、母が、かたわらにすわって、静かに聞く」ことを鹿児島県下に呼びかけた。



【関連年表】

一九〇五年 誕生

一九三三年

小説「山窩調」さんかちようを自費出版し、作家としてデビュー。

一九三八年

初めての少年向け動物小説「山の太郎グマ」を少年倶楽部に発表。

一九四七年

県立図書館長就任。

一九五二年

「片耳の大鹿」で文部大臣奨励賞を受賞。

一九六〇年

「母と子の二十分間読書運動」を提唱。

一九八七年 死去

彦穂の家は牧場を経営しており、彦穂は父に連れられて、狩りに出かけることもありました。毎日のように裏山に出かけ、日が暮れるまで遊んでいた彦穂が、日本中の人に知られる児童文学作家になったのですから、どうなるか分からないものです。

ただ彦穂は、素晴らしい数々の「出会い」に恵まれていました。

小学校六年生の時でした。彦穂は担任の先生から、皆さんもよく知っている「ハイジ」の本を借りることになります。そこには、ヨーロッパ・アルプスの鮮あざやかな夕焼けが生き生きと描かれていました。

ハイジと同じようにアルプスの山に住んでいた彦穂の中で、遊んでいるだけで気がつかなくなった周りの大自然と、「ハイジ」の世界とが重なります。そうして彦穂は、

【ハイジ】

有名な「アルプスの少女ハイジ」のこと。スイスの作家、ヨハンナ・スピリ作。

幼い頃に両親を亡くした少女ハイジが、アルプスの大自然、動物や周りの人々との触れ合いを通して様々な事を学び、健やかに育っていく物語。



これまで覚えたことのないような感動を胸に、裏山へ、日本アルプスの夕焼けを見に駆け出しに行ったのでした。

この一冊の本との出会い以後も、多くの本との出会いがありました。中でも、中学一年生の時に読んだツルゲ―ネフの「りょうじん 獵人日記」と、大学生の時に読んだジャック・ロンドンの「南海物語」は、彦穂が本の読み手ではなく、書き手を志すきっかけとなった本です。

また、中学生時代には、二人の人物との出会いもありました。佐々木八郎という国語の先生と、正木ひろしという英語の先生です。佐々木先生は、彦穂の作文を取り上げて褒めてくれた人物で、彦穂が文章を書くことを好きになるきっかけとなりました。また、正木先生は、彦穂に「獵人日記」を貸してくれた人物で、後に彦穂は、先生の作った文学サークルに入り、人生や文学等について論じました。この二人は、その後の鳩十の生き方に大

【描写してみよう】

自分の好きな風景や情景を、自分の言葉で文章にしてみよう。

【獵人日記】

ロシアの作家、ツルゲーネフの作品。

ロシア帝国の農民の生活が、ロシアの美しい自然を背景に、写実的に描かれた短編小説集。

【南海物語】

アメリカの作家、ジャック・ロンドンの作品。

南の海を舞台にした冒険物語。



【城山から見た桜島】

きな影響を与えた存在であると、後に本人が述懐じゆっかいしています。

「南海物語」の影響を受け、自分も作家になって南海を書くことを夢見た彦穂は、大学を卒業すると長野を旅立ちました。しかし、この南海行きは妻の父親から反対され、最後は断念せざるを得なくなります。今更引き返すこともできなかつた彦穂は、医師として鹿児島で働いていた姉を頼り、どうにか種子島に小学校教師として赴任ふにんしたのでした。

とは言え、もともと彦穂は南海にあこがれて、南海のことが書きたいと長野を出たのですから、鹿児島に長く住むつもりはありませんでした。「ここで、一年ぐらい働くか。」程度の軽い気持ちです。しかし、その次に赴任した加治木高等女学校の山口校長先生から執筆活動を

一九二八年（昭和三年）、椋鳩十は二十三歳で学生結婚する。

励まされたことが大きな転機となり、彦穂は本格的に鹿
児島の地で小説を書くようになっていきました。

三年ほどが過ぎ、兼業作家・棕鳩十の小説や詩は徐々
に世の中に認められはじめ、いつしか鹿児島も、すつか
り彦穂の第二の故郷となつていったのです。

そして、棕鳩十を児童文学・動物文学の世界へ進ませ
る大きな転機が訪れます。「少年倶楽部」の編集長、須藤
憲三^{けんぞう}氏との出会いでした。

「少年倶楽部」は、当時の中学生たちに絶大な人気を誇
っていた娯楽雑誌で、鳩十の作品を高く評価していた須
藤編集長は、動物や自然を題材にした子ども向けの作品
を書いてみるよう、鳩十に繰り返^すし勧めていました。

もっとも、鳩十は当初、この依頼に対して消極的でした。
その二年前に起こった満州事変を機に、厳しい言論^{げんろん}



【少年倶楽部】
月刊総合雑誌。一九一四年（大
正三年）に創刊され、一九六二年
（昭和三十七年）に終刊となった。

【怠け賃】

須藤が鳩十に届けた百円には、「今年はみごとにまけたから、そのなまけ賃……」という手紙が添えられていた。

「怠け賃」とは、働かないことに対する報酬という意味であるから、本来あり得ない表現である。しかし須藤は、このユーモラスな言葉に、「今の君は怠けている」「君は作品を書くべきである」という強烈なメッセージと、「(前払金などではなく)あくまで過去の怠けに対する報酬であるから、気にせず受け取ってもらって構わない」という気遣いを織り込んでみせた。編集者としての須藤のセンスを感じさせるエピソードである。

統制が布かれる中、自身が発表してきた一連の山窩ものの作品が発禁処分を受けていた鳩十には、他のジャンルを顧みる余裕はなかったのです。しかし、ちょうどこの頃、椋鳩十の母や妻が相次いで病に伏せる事態が重なり、教員の給料だけでは看護を続けることが厳しくなっていました。

そんな中、須藤編集長は、よほど鳩十を信頼していなければ出来ない行動に出ます。当時の平均月収の四か月分に当たる百円という大金を、鳩十の家に届けたのです。

「怠け賃」という、鮮やかな一言を添えて。

この編集長の振る舞いに感じ入った鳩十は、そのアドバースを受け入れ、「少年倶楽部」で動物を主人公にした小説を書いていくことを決意しました。一九三八年(昭和十三年)、鳩十が三十三歳の時のことでした。それから鳩十は約五年間にわたり、「少年倶楽部」で児童向け文

【山窩】

定住することなく、山間を移動しながら生活する人々の総称。



学作品を発表し続けます。

動物のことを書くには、動物のことをよく知らなくてはいけないと考えた鳩十は、自分の家での飼育観察も行いました。一番初めに飼育したのは、住んでいた加治木という土地柄もあり、クモだったと言います。それから、トカゲ、ネズミ、ネコ、イヌ、小鳥、ムカデ。サルやイノシシの飼育もしました。

しかし、大切に飼えば飼うほど、人間の匂いの強い家畜になり、野生での生態せいたいは分からないままです。彦穂は、自分が書く動物達の本当の姿を知るため、屋久島を五十回以上訪ねて原生林を歩き回ったり、地元の狩人かりゅうとから直接話を聞いたりもしました。

「孤島の野犬」や「大造じいさんとガン」など、こうして生み出されていった数々の動物文学や児童文学を通

【鳩十の自然研究】

鳩十は、現在の薩摩川内市の甑こしき島や、湧水町の栗野岳などにも出向いている。



(始良市)

して、鳩十は子どもたちに、「生きることの美しさ・素晴らしさ」や「人間と自然が共存することの大切さ」などを伝えようとしたのです。

そして、鳩十の多くの作品は数々の賞を受賞し、作家としての鳩十の評価が確立されていきました。中でも、一九五二年（昭和二十七年）に文部大臣奨励賞を受賞した「片耳の大鹿」は、様々な出会いを繰り返してきた彼の、集大成と呼べる作品です。

鳩十は、一九四七年（昭和二十二年）まで十七年間、鹿児島県の国語教師を務めた後、同年から鹿児島県立図書館長に就任します。その後、一九五八年（昭和三十三年）の奄美分館の設置や、「母と子の二十分間読書運動」などに積極的に取り組み、鹿児島の子どものための読書活動の推進にも多くの貢献をしました。

【主な受賞作品】

- 「片耳の大鹿」
- ・文部大臣奨励賞
- 「大空に生きる」
- ・小川未明文学奨励賞
- 「孤島の野犬」
- ・サンケイ児童出版文化賞・国際アンデルセン賞国内賞
- 「マヤの一生」
- ・第一回赤い鳥文学賞・児童福祉文化奨励賞
- 「大造じいさんとガン」
- ・和国特許委員会最優秀賞・児童学校学習最適賞

そして、一九八七年（昭和六十二年）、桜島を望む病院で、鳩十は八十二歳の生涯を終えます。その死の前日、夫人に口述を頼んだ鳩十は、一篇いっぺんの詩のような言葉を残しました。

日本の村々に

人たちが

小さい 小さい よろこびを

追っかけて 生きている

ああ美しい

夕方の家々の窓のあかりのようだ

「生」に対する、どこまでも温かい彼のまなざしが込められた、静かに心に残る「作品」ではないでしょうか。

鹿児島県立図書館に、一九八三年（昭和五十八年）に建てられた鳩十の文学碑には、「感動は人生の窓を開く」

【紹介文を書いてみよう】
これまでに自分が読んで印象に残っている本の、紹介文を書いてみよう。

という、彼の有名な言葉が刻まれています。

今までに、皆さんの人生の窓を開くような、一冊の本や言葉との出会いは、ありませんでしたか。それはもしかすると、椋鳩十先生からの贈り物かもしれません。
